

優秀賞

【学級活動】

自治的、自発的な学級文化の創造 ～3つの学級活動を柱として～

愛知県豊橋市立富士見小学校

水流 卓哉



1 | 研究の背景

平成29年に告示された「小学校学習指導要領解説 特別活動編」では「特別活動は、学級活動における自発的、自治的な活動を中心として、学級経営の充実に資するものであり、特別活動の充実により各教科の『主体的・対話的で深い学び』が支えられるという関係にもある」と示されている。また、これに対応して「特別活動全体を通して、自治的能力や主権者として積極的に社会参画する力を育てることを重視し、学級や学校の課題を見だし、よりよく解決するため話し合って合意形成すること、主体的に組織をつくり役割分担して協力し合うことの重要性を明確にした」と指摘されている。これらのことから、多様な個性をもつ人間関係の中で一人一人が合意形成に参画したり様々な役割を担ったり、協働して楽しく豊かで規律ある生活を築いたりしようとする特別活動を核とした学級活動は、やがて未来を担う子どもたちにとって確かな力になっていくと考えられる。

担任した小学5年生では、人間関係が固定化し、他者とかかわることに抵抗を示す姿が見られた。また、相手の存在を否定する言葉や、一方的に罵倒する言葉が日常的に飛び交っていた。そこで、子どもたちが他者と協働する良さを見だし、自発的、自治的に学級の文化を創造することができるようになってほしいと願い、本研究

の実施に至った。

2 | 研究の目的

本研究の目的は、より良い人間関係を形成できるようにするとともに、子どもたち一人一人が集団に埋没することなく、他者と協働しながら自発的、自治的な学級文化を創造できるような集団を育成することである。なお、学級活動における自発的、自治的な活動について「小学校学習指導要領解説 特別活動編」には以下のように示されている。

「自発的、自治的な活動」は、「自主的、実践的」であることに加えて、目的をもって編制された集団において、児童が自ら課題等を見だし、その解決方法・取扱い方法などについての合意形成を図り、協力して目標を達成していくものである。

加えて、脇田(杉田編著、2017)は「学級活動(1)の活動形態に示された「話し合い活動」(学級会)、「係活動」、「学級集会活動」を自分たちで考え、友達と協力して実践する活動のこと」と示している。しかし、これらの活動や話し合いの議題が教師から与えられたものである場合、自発的、自治的な活動になるとは考えにくい。ましてや、教師が学級を円滑に管理するために補

助的な意味合いとして係活動や当番活動を設定することや、活動が一部の児童に偏ってしまうものであっては学級経営の充実には到底つながらないと考えられる。そこで、子どもたちが見通しをもてるよう、学級活動年間計画を作成し、共有する時間を設けた(表1)。なお、作成にあたっては、国立教育政策研究所(2019)による「みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)」を参考にした。

3 | 研究の実際

(1) 「目指す姿の設定」(学級活動オリエンテーションから学級目標の設定まで)

新年度、新しい学年に進級した子どもたちは5年生という学年に期待と不安を抱いていた。理由を問うと、「新しい仲間たちとうまく付き合っていけるか心配」「クラス替えをきっかけに、仲良しの友達と離れてしまって残念」など、主に友人関係や対人関係上の問題に不安を抱く姿が見られた。そこで、4月から5月は、表1で示した年

間計画をもとにした学級活動のオリエンテーションと併せて、題材「5年生になって」の学習を行い、1年間の希望と見通しをもてるようにした。具体的な指導手順は表2の通りである。

話し合いでは自身が不安を感じていることを伝え合う中で、「友人関係に不安を感じているのは自分だけじゃなかった」「みんなも同じなんだ」と安心する様子が見られた。そして、理想の学級像への見通しをもてるようになると、子どもたちのほうから「理想の姿に近づくために学級目標をつくりたい」と声があがったため、全員に確認を取った上で学級目標作成を試みた。学級目標作成の手順を表3に示す。

学級目標作成にあたっては、まず目標をつくる価値や、目標を通してどのように成長していったほしいのかという教師の願いを伝えた。その上で、自分たちの理想とする学級像を実現するためにはどのような目標をつくとよいか考える時間を設けた。すぐに自分の思いや願いを決定することはせずに、その日は保護者と相談しながら自分なりの目標を決定し、短冊状に切った画用紙に書き

表1 5年A組 学級活動年間指導計画(筆者作成)

	月	学級づくりのステップ	主な特別活動		
一学期	4月	○第1ステップ 【教師主導期】	学級活動(3)「5年生になって」 学級活動(1) 学級目標の設定 学級内の組織づくり(学級活動) 係活動・当番活動・委員会活動の開始 学級活動(2)イ、ウ SNSの使い方 学級活動(1) 1学期の振り返り 宿泊学習(学校行事)	学級活動(学級会、当番活動、係活動)の定常的実施	<ul style="list-style-type: none"> 学級生活上のルールと学級の組織づくりを行い、集団形成の土台づくりを行う 学級や学校全体の目標を達成するための活動を分担し合って取り組む 学級目標が達成されているかどうかについて振り返る
	5月	教師の主導のもと、児童が望ましい集団活動を経験できるようにする			
	6月				
	7月				
二学期	9月	○第2ステップ 【児童の自主活動への移行期】	学級活動(1) 夏休み発表会をしよう 学級活動(1) 係活動をパワーアップ 運動会(学校行事) 学級活動(3)ウ 自主学習の工夫 全校駆け足(学校行事) 学級活動(2)ウ 病気の予防 学級活動(1) 2学期の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 練習や本番の取り組みを通して、学級集団の一員であることを自覚し、所属感を高める 異年齢集団で学校行事に取り組む中で、高学年としての自覚や責任感をもてるようにする 学級目標が達成されているかどうかについて振り返る 	
	10月	児童の多くが集団活動に慣れ、自主的に活動を進めることができる			
	11月				
	12月				
三学期	1月	○第3ステップ 【児童の自治的活動期】	学習発表会(学校行事) 学級活動(1) 5年A組カルタを作ろう 学級活動(1) 学級目標の振り返り 学級活動(3) もうすぐ6年生 学級活動(1) 1年間の振り返り 学級活動(1) お別れ会をしよう	<ul style="list-style-type: none"> 1年の学びを振り返りながら、その学びを発信する活動を通して、児童間の信頼関係をより強固なものとするとともに、自身の成長に気づけるようにする 学級目標が達成されているかどうかについて、1年間を通して振り返る 	
	2月	児童が生活の中で課題を見つけ、自主的な取り組みを計画・実行することができる			
	3月				

表2 題材「5年生になって」実施手順と方法

順	授業の展開
1	アンケート調査をもとに「どのような5年生になりたいか(理想像)」について話し合う
2	担任の考える理想の姿や願いを伝え、全力で応援することを約束する
3	楽しく豊かな学級をつくっていくために「理想の学級・学校生活」について話し合う
4	話し合いで決まったことをまとめて提示する
5	課題になることについては、全員で話し合っ解決できるようになってほしいという願いを伝え、そのための方法として学級会という手法があることを伝える(学級会の紹介)
6	1～5を踏まえ、子どもたち一人一人が具体的な行動目標を設定する

表3 学級目標の作成手順

順	具体的な手順と留意事項
1	児童・保護者・教師の理想像や願いを共有する
2	個々に持ち寄った目標を分類し、より具体的な目標へとブラッシュアップする
3	学級目標の達成に向けて学級会を実施し、個人目標を設定するとともに行動を促す
4	具体的な行動や目標の達成状況について定期的に振り返る

てくるよう促した。

翌日、子どもたちが作成してきた短冊を黒板に貼り出した。学級の数分の34個の意見が集まり、出された意見の中で同じような意味をもつ目標も見られた。そこで、類似した意見をKJ法の大要領でまとめていき、目標が具体的かつ達成可能なものであるか吟味していった。ここで大切なのは、「保護者の思いや願いも短冊に書かれた意見に反映されている」という共通理解を図ることである。例えば「困ったときには友達と力を合わせる」と「授業ではみんな協力して解決する」というように類似した目標であっても、その文言の根底にある思いは異なる場合がある。そこで、分類作業に入る前には「意味が似ているからといって安易にまとめるのではなく、互いに話し合っ、双方の合意が得られたらまとめるようにすること」を伝えた。その結果、①だれとでも仲良く、②学級や学校を盛り上げる、③みんなに親切にする、④下級生を助ける、⑤力を合わせる、の5つの意見に集約され、最終的にこれらの5つをまとめて「学校のスーパーヒーローになる」という目標設定がなされた(図1)。



図1 作成された学級目標

(2)「学級活動のシステム化」(学級会、当番活動、認め合い活動を柱として)

6月～7月になると、子どもたちによる提案で学級に議題箱が設置され、クラスや学級活動の中で生じた課題を集約し、学級会で話し合うということが日常化してきた。学級会を行う際には宮川(2012)や国立教育政策研究所(前掲)をもとに「出し合う」「くらべ合う」「まとめる」の3段階討議法を基本形として子どもたちの力で話し合い活動が進められるようにした。また、学級会導入期には、杉田(2013)によって示されている「学級活動(2)を成功させる8つのポイント」を意識し、子どもたちにも共有していくことで、最初は教師主導で進めていたが、次第に子どもたちだけでも運営できるようにした(表4)。

評価や学級活動の振り返りに関しては、学級会やその他の学級活動とも一貫性を意識できるよう国立教育政策研究所(2020)による「指導と

表4 学級会の進め方(杉田、2013をもとに)

順	具体的な手順と留意事項
1	何を指導したいのかをはっきりさせる(扱う題材のどこを指導するのかおさえる)
2	児童(学級)の実態をしっかりとつかむ(問題はどの程度で、どこで起きているのか)
3	指導したいねらい・目指す姿(学級像)を学級の実態に応じてはっきりさせる
4	中心となる問題点・指導展開の方法をはっきりさせる(3段階討議法)
5	展開終末には自己決定の内容を明確にする(何を、どのように具体的に決めさせる)
6	適切な資料を選ぶ(いつ・どこで・なんのためにを明確にする)
7	自己決定の時間を十分にとる(実際に実践できるような具体的な方法を決める)
8	事後指導・発展指導を重視する(他教科や児童会活動、学校行事との関連性を意識する)

評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料」に依拠して、図2のような学習カードを活用して定期的に振り返りを蓄積していった。

また、学級活動(1)の当番活動については、これまでの自身の取り組みを振り返ると「活動を行う人が限定されてしまう」「当番活動と係活動が混同してしまう」「子どもの自主性を尊重する係活動とは異なり、当番活動は教師発信のやらされ活動に終始していた」などの反省がある。つ

まり、杉田(2009)による「自らのよさを積極的に発揮し、自分たちの創意工夫によって、楽しい生活をつくり出していこう」という活動には程遠いものであった。そこで、当番活動を決めていく際には「学級にとって必要であり、友達のために自分が続けられる仕事」というテーマを設定し、複数人でまとまって活動をする当番活動ではなく、図3のように自分で考えた仕事を1人1つもてるようにした。

学級では「1人1役」と名づけられた当番活動であるが、例えばA児とB児が同じ仕事を選択する場合もある。そのような時は、互いに話し合い、協力し合ったり譲り合ったりするように促した。また、配付係や整頓係のように活動内容が多かったり活動範囲が広がったりする場合、1人

「当番活動をパワーアップしよう!」

5年 組 名前 _____

1 今日の授業でわかったこと

【知識・技能】

2 ぼく・わたしがきめた目標

【何を・どのように】 **【思考・判断・表現】**

【目標をパワーアップ】

自己の取り組みを振り返り目標達成に向けての手立てを再度考える機会を設ける

3 自分の活動をふりかえろう(よくできた◎ できた○ 次はがんばろう△)

月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日	月日
日常生活の様子を加味しながら、児童の自己評価をもとに取り組みを価値づけ、指導に生かす							

4 活動をして思ったことをかきましよう

【主体的態度】

取り組みを振り返り、次の学習に生かそうとしているかを見取る

5 先生からのコメント

教師からの肯定的なフィードバック

教師がコメントや朱書きを通して肯定的にフィードバックしていくことで、自身の取り組みを振り返るとともに、次なる活動への見通しがもてるようにする

図2 学習カードと活用上の留意点

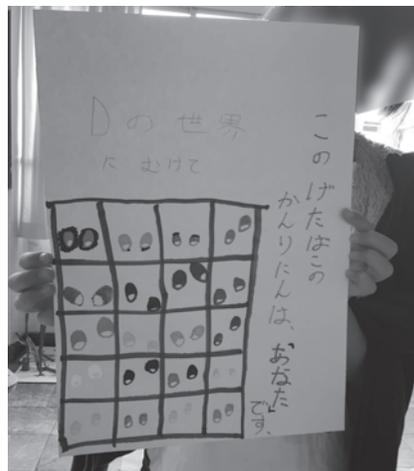


図3 下駄箱整頓係を選択した児童

で仕事をこなすことが困難な場合もある。そこで、朝の会や帰りの会の中の「当番からの連絡コーナー」で手伝いを募集することで協力できる体制をとった。なお、当番活動「1人1役」を組織する手順については以下に示す(表5)。

当番活動「1人1役」を通して、活動を自己選択することによって、生活日記などに「自分も学級の一員として活躍できている」「だれかの役に立てうれしい」のように所属感や貢献感を得ていることが見て取れる記述が増えていった。また、自分の仕事を1人で抱え込むのではなく、友達に助けを求めることで、自然な協働が生まれるきっかけとなった。しかし、この活動方法は、個人で役割を自己決定できるメリットはあるものの、「窓を開ける」や「教室の電気をつける」のように、単純な活動を選択した児童にとっては個性化してしまうこともあった。そこで、子どもたちが「自分もやればできる」「がんばってよかった」などの自己効力感をもてるようにするために、国立教育政策研究所(前掲)による「学級活動(2)事後指導で目標実現への意欲を高めるためには?」を参考にした認め合い活動を取り入れた。

具体的には、月に1度、「お世話になっている人」や「学級のためにがんばっている友達」のようなテーマを設定し、葉っぱの形をした画用紙にメッセージを書いて渡せるようにした。この活動は学級で「ありがとうリーフ」と名づけられ、月に1度の振り返りの時間に限定することなく、画用紙を当番活動コーナーに用意しておくこと

によって、個々の努力を互いに認め合う機会や頻度を増やせるようにしていった。なお、ここまでは主に1学期に行った取り組みを中心に述べてきたが、この年に取り組んだ学級会、当番活動「1人1役」、認め合い活動「ありがとうリーフ」の3つの実践は、学級のシステムが定着した2学期以降にも学級づくり3本柱として発展していった。

(3)「自主的な学級活動への移行期」(教師と子どもによる学級文化の共創を意識して)

2学期になると、活動が停滞することもあり、これまで続けていた活動に対する課題も表出するようになった。例えば、学級会については「話し合う人が一部の人に偏ってしまう」「みんなの意見を生かせるような学級会にしたい」という声があがった。そこで、子どもたちが多様な意見をもつことができるように、事前の活動として杉田(前掲、2013)を参考にワードダイヤモンド法を活用することによって、提案理由の中から考える視点を書き出し、発言ができなかったとしても自身の考えを意思表示したり整理したりできるようにした(図4)。また、学級会の議題によってはアイデアが出ずに話し合いが停滞してしまうこともあった。そこで、生成AI「Chat GPT」にプロンプトを入力して得られた回答を参考にすることで話し合い、活性化を図った。

さらには、子どもたちならではのアイデアも学級会に取り入れられるようになった。例えば、図5のように、学級会で司会を務めた子どもたちは、

表5 当番活動「1人1役」の組織手順(杉田、2013・国立教育政策研究所、2019をもとに)

順	具体的な手順と留意事項
1	当番活動の意味や価値を伝え、前年度に行った活動の内容を子どもたちと共有する
2	当番活動と係活動の違いを確認する
3	学級内にどんな係があるとよいか「活動探し」を行う(全体の話合い活動)
4	全体の話合いで出た意見をもとに自分の役割を決める(原則、全員が1つ役割をもつ)
5	当番活動コーナーをつくる(子どもたちが活動する際に必要となるものをまとめておく)
6	自分の役割名を決めて、活動計画案を作成し、ポスターにする
7	朝の会や帰りの会の時間を使って定期的に活動を振り返り、自身の取り組みを図2の学習カードにまとめたり、必要に応じて友達からアドバイスをもらったりする

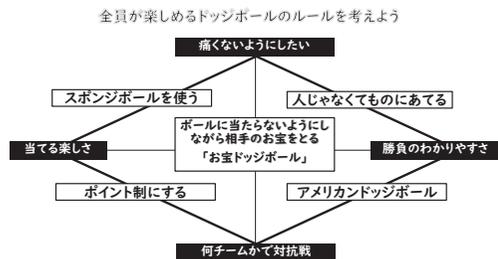


図4 ワードダイヤモンド法

タブレット端末のコラボレーションアプリに座席表を表示し、全員が意見を入力できたところで話し合えるようにしたり、話し合いの中で意見が複数に分かれてしまうような時には図6のように思考ツール「Yチャート」を端末上に表示し、自身の考えの立ち位置を可視化して話し合う中で合意形成を図ったりする姿も見られた。このように、4月当初に教師が示した学級会の実施手順(表4)に加えて、子どもたちによる柔軟なアイデアが取り入れられたことで、議題について深く考え、一人一人の子どもが理由を明確にした意見をもって自発的に話し合う姿が見られた。

当番活動「1人1役」についても、課題が浮き彫りになった。例えば、「僕の選んだ落とし物係は、活動の機会が少ないからもっと仕事したいです」「似た仕事の取り合いで、喧嘩みたいになることがあります」のような問題点が出された。そこで「困ったことがたくさんあるみたいだけどどうしたらいいと思いますか?」と教師から声をかけると、「みんなで話し合って解決したい」「学級会を開きたい」と声があがったため、「1人1役をパワーアップさせよう」という議題設定の下、話し合いが行われた。その話し合い活動では、「係の人数が少なかったり困ったりしている人がいたらもっとみんなで声をかける」「仕事量が少ない人は、クラスのためになる新しい仕事を見つけて増やす」の2点に集約された。また、この活動形態は、自分で活動を調整していくものであるため人によって役割の数が変動することを予想した子が「1人1役っていう名前は変だよな」と述べ、改めて当番活動「1人〇役」へと名前が変更さ



図5 端末を活用する司会の児童



図6 端末による意見の視覚化

れることとなった。

この「1人〇役」とは、1学期に実施した「1人1役」を発展させたものであり、活動を1つに絞ることなく、よりよい学級にしていくために気づいたことがあれば必要に応じて自身の当番活動を増やしていけるようにするものである。そして、この当番活動「1人〇役」をきっかけに子どもたちの活動や協働の幅が広がったことによって、認め合い活動「ありがとうリーフ」についても成長が見られた。具体的には、子どもたちによる「ありがとうリーフをもっとたくさんの人に渡したい」「みんなのよさが認められる活動だからこそ、もっと広げていきたい」という願いのもと、図7のように認め合い活動の中でもらったありがとうリーフを教室背面に掲示し、木の葉のように広げようという活動に発展した。

なお、認め合い活動「ありがとうリーフ」から発展させたこの活動は学級内で「ありがとうの木」と名づけられ、自治的、自発的な活動に取り組



図7 子どもたちによって作成された「ありがとうの木」

む中で、互いのよさや個性、多様な考えを認め合う活動へと発展していった。そして、1学期は教師による指導助言が相対的に多かったものの、2学期には教師と子どもたちとで学級の文化を共創していくイメージの共通理解を図っていったことによって、子どもたち主体の自発的、自治的な活動の頻度が増えていった。

(4)「児童主体の自治的活動期」(自治的、自発的な活動を通して自治的な集団を目指す)

3学期になると、学級における生活上の課題を見い出して議題設定し、解決するために合意形成を図ったり、意思決定したりすることや、話し合いを通して他者の様々な意見に触れ、課題について多面的・多角的に考えたりする姿が見られるようになった。一方で、人間関係が良好になり、学級集団としてまとまっていくにつれて「クラス替えをしたくない」「ずっとこのままがいい」というように6年生に進級することに不安を感じていることが見て取れる発言が多くなってきた。実際に、学級会の議題箱にも図8のように6年生に向けて不安を感じていることを示唆した提案用紙が見られた。

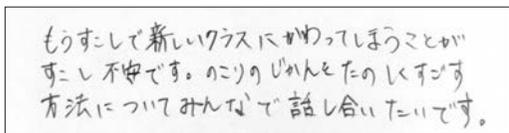


図8 児童による議題提案用紙

そこで、国立教育政策研究所(前掲)による「学級活動(2)事後指導で目標実現への意欲を高めるためには?」と「将来を見通し、なりたい自

分に向けて努力する学級活動(3)」を参考にして「なりたい6年生像について考えよう」を議題として話し合う時間を設けた。話し合いでは、4月に設定した目指す姿に立ち返りながら「5年生での学びを生かして学校のリーダーとして全校を支えられるようになりたい」「個人としても学年としても成長していきたい」のように、5年生として過ごした1年間を振り返りながら「なりたい自分像」を模索できるようにした。また、「ここまで成長できたのは自分だけの力ではなく友達が存在があったから」「そんな仲間と来年も成長するために残された3か月間をもっと大切にしたい」と、共に高め合った仲間たちに感謝をしながら5年生としてできることをして、最後まで成長しているという結末になった。

この話し合い後、子どもたちが最初に取り組んだ活動が「当番活動『1人〇役』を『1人0(ゼロ)役』にしよう」というものであった。これまでは、教師が提案する「当番活動」という枠組みの中で活動を行ってきたが、これからは学級内における当番活動の制度そのものを無くして、気づいた人が学級のためにアクションを起こしていこうという案が提案された。当然、話し合いの中では「係を無くすことはうまくいかないのではないか」「係が無くなることでうまくいかないことも出てくると思う」という心配意見も出たが、「これまで以上に互いに声をかけ合って協力すればできると思う」「まずは1週間お試し期間にして挑戦してから継続するかどうか考えるのもいいかもしれないよ」「来年はみんなが学校のリーダーになるのだから、ここでリーダーシップをとる練習をしてみるのはいい経験になると思う」と、ポジティブに合意形成を図ろうとする姿が見られた。

これらを踏まえて、当番活動「1人0(ゼロ)役」のお試し期間を設けることになった。教師は見守る姿勢を取っていたが、落とし物が落ちていたら拾った人が声をかける姿や、朝の会では「今日の休み時間にみんなでクイズ大会をやりようと思いますが、どう思いますか」のようにレクリエーション係としての役割を果たす児童の姿が自然発生

的に見られた(図9)。このように、リーダーシップを発揮する児童が、その場に応じて交代するようになり、できるだけ多くの児童がリーダーとして影響力を発揮しようと切磋琢磨する姿が見られた。また、中には学級目標の「学校のスーパーヒーローになる」と関連させて「みんながみんなのスーパーヒーローになれている」と振り返りに記述する姿も見られた。



図9 クイズ大会を行う児童たち

一方で、この学級目標「学校のスーパーヒーローになる」について2月に振り返りを行った際には、「学級のスーパーヒーローは増えてきたけど、学校のスーパーヒーローにはまだなれていない」と振り返る姿が見られた。そこで、学校に向けて何かできないか相談する時間を設けたところ、認め合い活動「ありがとうの木」での取り組みを学級から学校に広げて「これから卒業する6年生にありがとうの思いを卒業証書にして届けよう」という結論になった。また、この卒業証書を作成するにあたり、何を証書に書き込むか学級会で話し合う時間を設けた。その結果「6年生全員のよさを学校中の児童や先生たちにインタビューしてまとめたものを書き込む」「ありがとうの文字が入った消しゴムハンコを作成して押印する」「学校のキャラクターを入れる」「筆ペンを使って作成する」などの意見に集約された。その後は、学校行事「6年生を送る会」や「卒業式」に向けた準備を進めながら、ありがとうリーフをモチー

フにした卒業証書サプライズで作成し、完成した卒業証書は無事に「6年生を送る会」で渡された(図10)。このように、1学期は教師が枠組みを示した3つの活動であったが、学級集団が成熟していくにつれて、自分たちでよりよいものにしていこうと、その枠組みを自分たちで広げていこうとする姿が見られた。そして、学級集団の成熟に伴って、自分たちの活動が、個人から学級、学級から学校へと広がりを見せていった。

図11は全ての活動を終えた後に書かれた振り返りである。振り返りには「みんなではなしあったりする中で、うまくいかないことがあっても、かいつできるのがぼくらのクラスのよさだと思います」と、学級内で起こったことは、全員で話し合って解決をするという自発的、自治的な学級文化が根づいている様子や、学級への支持的な風土が醸成されていることが見て取れる記述が確認された。また、振り返り後段には6年生を送る会が成功したことを踏まえて「先生の力にたよらなくてもぼくたちの力をあわせればなんでもでき



図10 ありがとうリーフをもとに作成した卒業証書を渡す姿

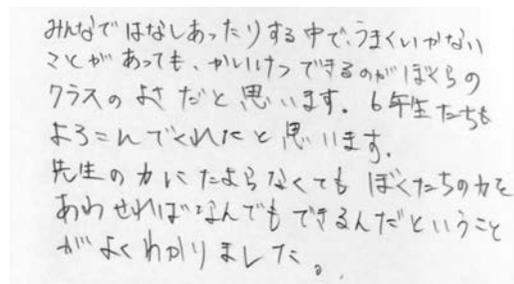


図11 6年生を送る会後に書かれた振り返り

るんだということがよくわかりました」と学級が自治的な集団へと成熟していることを実感している様子が見て取れる記述が見られた。

4 | 結果と考察

本研究の目的は、よりよい人間関係を形成できるようにするとともに、子どもたち一人一人が集団に埋没することなく、他者と協働しながら自治的、自発的な学級文化を創造できるような集団を育成することであった。そこで、教育力のある集団として高い共同体感覚が育まれている学級集団であると指摘する会沢・岩井(2014)や、自治的集団育成に関して、児童の主体性を引き出し、共同体感覚向上を促進する教師の指導行動に言及した荒巻・赤坂(2017)の研究に依拠して、高坂(2014)による「小学生版共同体感覚尺度」と浅井(2009)による「主体性尺度」

を用いて学級状況の変容を測定した(表6)。

逆転項目を修正した後、6月と12月に得られたデータをもとに対応のあるt検定を行った。有効回答数は、学級全員の34名であった。6月から12月の間に「小学生版共同体感覚尺度」と「主体性尺度」において、有意な正の変容が認められた。これらの結果をもとに本研究で得られた成果を考察していく。

成果の第一は、表1の学級活動年間指導計画を作成し、教師が1年間を見通した学級像や子どもの姿を明確なものにするとともに、先行研究をもとに実施した学級会や当番活動、認め合い活動などの学級活動におけるオリエンテーションに時間をかけたことである。このオリエンテーションが、多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身につけるきっかけになっていったと考える。そして、変容したのは子どもた

表6 各尺度の結果

n=34		6月	12月	t 値
小学生版共同体感覚尺度				
貢献感	MEAN	4.54	4.71	4.48*
	SD	0.42	0.31	
所属感・信頼感	MEAN	4.16	4.41	4.99*
	SD	0.69	0.75	
自己受容	MEAN	3.35	3.55	5.20*
	SD	0.52	0.37	
主体性尺度				
積極的な行動	MEAN	4.61	4.78	11.59**
	SD	0.21	0.17	
自己決定力	MEAN	4.53	4.83	8.64**
	SD	0.47	0.36	
自己を方向付けるもの	MEAN	4.09	4.34	2.43*
	SD	0.79	0.67	
好奇心	MEAN	3.92	4.23	3.03**
	SD	0.81	0.76	
自己表現	MEAN	4.31	4.62	2.47*
	SD	0.82	0.54	

+p<.10 *p<.05 **p<.01

ちだけでなく教師も同様である。「子どもたちを律する指導から、子どもたちと共に創る活動」への指導観を意識できたことが、よりよい学級・学校生活や人間関係の構築につながっていったと考えられる。

成果の第二は、3つの柱となった学級活動の関連性を意識できた点である。本研究で取り上げた学級会や当番活動、認め合い活動は、一つ一つの活動に目を向けてみると「点」の活動であるが、その「点」と「点」の関連性を意識していくことによって、「線」になっていったと考える。そして、つながりを見せた3つの活動は、学級づくりのシステムとなり、集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりする機会の増加につながったと考える。また、これらの実践を繰り返していくうちに、子どもたちによる自治的、自発的な集団活動になり、自分たちの思いや願いを実現するための行動化を促したと考えられる。

5 | 今後の課題

本研究を通して柱となっていた学級会、当番活動、認め合い活動の3つの「点」としての活動が「線」としてつながっていったことによって子どもたちによる自治的、自発的に学級の文化を創り上げていこうという姿が見られるようになっていったが、これらの活動が、学級活動や学校行事のみに留まってしまっていたことが課題である。実際に、「学習指導要領第6章の第3の1の(2)」では以下のように示されている。

各学校においては特別活動の全体計画や各活動及び学校行事の年間指導計画を作成すること。その際、学校の創意工夫を生かし、学級や学校、地域の実態、児童の発達の段階などを考慮するとともに、第2に示す内容相互及び各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間などの指導との関連を図り、児童

による自主的、実践的な活動が助長されるようにすること。また、家庭や地域の人々との連携、社会教育施設等の活用などを工夫すること。

よって、今後は関連性のある複数の学級活動を「線」としてつなぐだけでなく、それらの学びを教科場面や家庭、地域の人々との連携を意識したカリキュラム・マネジメントの在り方を模索して、「線」と「線」をつないで「面」にしてより教育的効果の最大化を目指していくことが必要である。

6 | おわりに

「6年生になっても新たな仲間たちとこの学校を支えていきたい」という思いを高めた子どもたち。4月当初は人間関係が固定化し、他者とかかわることに抵抗を示す姿が見られ、相手の存在を否定する言葉や、一方的に罵倒する言葉が日常的に飛び交っていた学級であったが、本実践を通して大きく変容を見せた。そして、その集大成は子どもたちと過ごした最後の日に見られた。

最終日の帰りの会、担任から通知表を渡し、6年生でも本年度の学びを生かして学校を支えてほしいという思いを伝え、最後の挨拶をしようとした際、学級委員の合図で「ちょっと待ったー！」と声がかかった。担任が驚いていると、代表の子どもたちが担任のためにサプライズで作成した通知表を渡してくれた(図12)。通知表の内容を確認すると、1年間の授業を教科ごとに「面白さ・楽しさ・分かりやすさ」の3観点(A・B・C)で評価されていた。そして、ほとんどの教科が最も高い「A」という判定であったが、学級活動は「C」判定であった。子どもたちにその理由を尋ねると、「先生の授業はいつもわかりやすくおもしろいからA判定」「学級活動については最初、先生が色々教えてくれたけど、今は全部自分たちが中心になって進められるようになって

 <p>令和3年度 通知表</p> <p>評価方針</p> <p>『国向き』授業のときの面白さ 『楽しさ』授業のときの楽しさ 『分かりやすさ』授業のときの 分かりやすさ</p> <p>豊橋市立二川小学校 第28期 5年2組0番 水添 卓哉先生</p>		<table border="1"> <tr> <td>算数 面白さ 楽しさ 分かりやすさ</td> <td>A</td> <td>算数 面白さ 楽しさ 分かりやすさ</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理科 面白さ 楽しさ 分かりやすさ</td> <td>A</td> <td>社会 面白さ 楽しさ 分かりやすさ</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>体育 面白さ 楽しさ 分かりやすさ</td> <td>A</td> <td>学習 面白さ 楽しさ 分かりやすさ</td> <td>C</td> </tr> <tr> <td>道徳 面白さ 楽しさ 分かりやすさ</td> <td>S</td> <td>外国 面白さ 楽しさ 分かりやすさ</td> <td>A</td> </tr> </table>	算数 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A	算数 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A	理科 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A	社会 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A	体育 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A	学習 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	C	道徳 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	S	外国 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A
算数 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A	算数 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A															
理科 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A	社会 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A															
体育 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A	学習 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	C															
道徳 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	S	外国 面白さ 楽しさ 分かりやすさ	A															

図12 子どもたちによる担任への通知表

たからC判定だよ」と笑顔で話した。これらの発言から、子どもたちが自治的、自発的な集団としてまとまっていったのだということを確認した。

杉田（前掲、2013）は「今、いじめ問題への過度な反応から、人間関係などの諸問題について大人が即時介入したり、問題が起きる前に手を出してしまったりという指導が多くみられる」と指摘した上で、本音も言わず、争いもせず、批判もし合わない表面的な仲良し集団も多いとまとめている。実際に、小・中・高・特別支援学校における児童生徒のいじめ認知件数や不登校の児童生徒数に関して共に過去最多数を更新していることが報告されているが（文部科学省、2023）、いじめ予防の役割を担うたくましい集団を育てるためには、子どもたちの力を信じて任せることが大切であるということ、子どもたちの姿から学んだ実践となった。これからの共生社会の担い手となる子どもたちが実社会に出て生きて働く本物の資質・能力を身に付けるためには、本音で話し合い、ぶつかり合い、張り合う人間と人間関係の中で問題を解決することのできる特別活動や学級活動だからこそ実現するのだということ、心を得て、今後も研究や実践を続けていきたい。

【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』2017.
- ・文部科学省 国立教育政策研究所『「指導と

評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 特別活動』東洋館出版社、2020.

- ・文部科学省 国立教育政策研究所『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる 特別活動（小学校編）』文溪堂、2019.
- ・杉田洋『よりよい人間関係を築く特別活動』図書文化社、2009.
- ・杉田洋『自分を鍛え、集団を創る！ 特別活動の教育技術』小学館、2013.
- ・杉田洋『小学校新学習指導要領ポイント総整理 特別活動』東洋館出版社、2017.
- ・宮川八岐『改訂版 やき先生の特別活動講座 学級会で子どもを育てる』文溪堂、2012.
- ・文部科学省『令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』2023.
- ・会沢信彦・岩井俊憲『今日から始める 学級担任のためのアドラー心理学』図書文化社、2014.
- ・荒巻保彦・赤坂真二「自治的集団への高まりを促進する教師の指導行動～主体性・共同体感覚の変容から～」上越教育大学教職大学院研究紀要、第4巻、pp. 1-11、2017.
- ・高坂康雅「小学生版共同体感覚尺度の作成」心理学研究、第86巻6輯、pp. 596-604、2014.
- ・浅海健一郎「子どもの主体性と適応感の関係に関する縦断的研究」九州大学心理学研究、第10巻、pp. 217-223、2009.

[注] 学習指導要領・解説では「自発的、自治的」としているが、本研究では自治的能力の育成を重視したことから、「自治的、自発的」とした。